

Hello! FUJISEI

No.57

昭和56年から30年連続で死因順位の第1位を続けているがん（悪性新生物）。その死亡者数は、昭和45年の約12万人と比べると、40年間に3倍に増加しています。

もっとも怖い病気と言われるがんですが、部位によりその傾向に差があることが分かります。

厚生労働省の「平成22年 人口動態統計月報年計（概数）の概況」によると、男性の「肺」は上昇傾向が著しく、平成5年に「胃」を上回って第1位となり、平成22年の死亡数は5万369人、死亡率（人口10万対）は81.8となっています。また、女性の「大腸」と「肺」は上昇傾向が続いており、「大腸」は平成15年に「胃」を上回って第1位となり、平成22年の死亡数は2万314人、死亡率は31.4となっています。

男性については、昭和40年代は胃がんが圧倒的に多かったのですが、肺がんが急増し、胃がんに代わって断然1位となっています。死亡率は、胃がんは昭和40年には男性で59.4、女性で35.5でした。肺がんは男性で11.2、女性で4.6に過ぎませんでしたが、平成22年では男性81.8、女性30.0と高くなっています。若い時からの女性の喫煙率の上昇によって、女性においても肺がんの増加が懸念されています。大腸がんも男女とも死亡率が大きく上昇しています。

このような状況の要因としては、

部位により死亡率が大きく異なる“がん”

男性 肺の上昇が顕著
女性 大腸と肺が上昇

食生活をはじめとする日本人の生活習慣の変化などが挙げられますが、医療技術の進歩による早期発見も要因のひとつです。程度の小さながんでも見つけることができ、早期発見はもちろんのこと、がん治療後の再発や他臓器への転移の観察にも大いに役立つとされています。

悪性新生物の主な部位別死亡率（人口10万対）の年次推移

厚生労働省「平成22年 人口動態統計月報年計（概数）の概況」より

